

★★平成十八年『路』年間賞★★

〈選考委員〉 伊藤我流・岩淵黙人・内平登代子・金子美知子

小泉正巳・高橋里江子・瀧 正治・藤原和美・堀井 勉

・吉澤和子(五十音・敬称略)

最高賞(賞状・入賞句彫刻楯)

夕日抱く無言の海にある戦史

木村 紀夫

◎和美、○和子、○美知子

優秀賞(賞状・入賞句彫刻楯)

ヒロシマを越える片仮名みあたらず

荻原 鹿声

◎黙人、○里江子、○登代子、△和美

受賞のことば

最高賞 木村 紀夫



思ってもみなかった受賞に、びっくりしています。ありがとうございます。ございました。

自分の句がはたしてどれだけのものか、そんな思いにいつも悩んできました。

この句は日課の散歩で、海沿いの通りを歩いていたら、ふと海の静けさに胸を突かれてできた句です。

関係者の皆様へ、心より感謝いたします。

受賞のことば

優秀賞 荻原 鹿声



意識して社会性のある句を書き、句想の幅を広げたいと思うようになつて数年になります。一事象を切りとるのではなく、その背景にあるものを訴えたいと挑戦していますので、受賞を大変嬉しく思います。人は、時事川柳だと言いますが、私自身への課題でもありますので、気にはしていません。これからも迷いながら歩いてゆくつもりです。推薦委員の方々、選考委員の方々に、心から厚くお礼を申し上げます。ありがとうございました。

次点（高点順、同点の場合は掲載月順）

去る嵐追ってコスモス立ち上がる

二宮 茂男

○我流、○美知子、△和子、△登代子

赤ちゃんが笑うと笑う天地人

二宮 茂男

◎和美、○默人、△正巳

無印に成って溶けだす背の重石

坂本 嘉三

◎登代子、○和子

デッサンのときは笑っていた家族

荻原 鹿声

◎里江子、○正巳

肩の荷を下ろしひとりのマッチ棒

野村 春香

◎正巳、○登代子

天高くさらりと交わす友の愚痴

谷田部富義

◎和子、○我流

いい灰になるため笑顔絶やさない

瀧 正治

◎正巳、○勉

カギ穴へ追い詰められている子供

阿部闕句郎

◎美知子

八十路越え老いの哲学追い続け

谷田部富義

◎美知子

次々に子をもいでゆく子守柿

瀧 正治

○和美、○默人

花の散る角度で嘘が見抜かれる

佐々木彩乃

◎我流

シーソーの真ん中に置く鳩時計

横田 藍

○登代子

神様がよく見えてくる病垂

飯田 昭

◎正治

山笑う過去をゆっくり消しながら

古俣 麻子

◎正治

善人を少し演じてやみつきに

樋口 仁

◎里江子

種袋すべて咲かせてやりたいな

堀井 勉

◎我流

生も死も心もとない躰糸

高橋 甫

◎勉

傾いた塔の名前を父という

樋口 仁

◎默人

病む人と語らん時雨来ぬうちに

高橋里江子

◎和子

五センチが欲しい欲しいとする背伸び

和泉あかり

◎ 勉

団らんのない子供らの百十番

高橋里江子

○ 美知子

川汚し空気を汚すきれいな好き

二宮 茂男

○ 勉、△ 正治

ロボットへ情をゆだねるエピローグ

松方 尚義

○ 正治、△ 正巳

老いてゆく哀しさをみる母を見る

後藤 洋子

△ 黙人、△ 和子

山頂も麓も風の通過点

木村 紀夫

○ 正治

ペンだこも消えて人間退化する

松田 一洲

○ 里江子

母さんの視線の中で暖まる

奥村 健吾

△ 美知子

合掌のくぼみに母が居てござる

大橋 政良

○ 我流

涙腺のゆるんだ鬼へ見ない振り

吉澤 和子

○ 正巳

不器用な台詞に流る情の河

渡部トミ子

△ 美知子

早送りしたい 曇天ものがたり

伊藤 我流

○ 里江子

郭公鳴く引き分け組がいてもいい

岡田 話史

○ 和美

パレットに集めた風が動かない

佐々木彩乃

○ 正巳

サボテンの不条理ケアの指を刺す

石井 沙江

○ 登代子

深追いはすまい余生が無駄になる

岩渕 不弁

○ 和美

喝采の聞こえぬ花道だっぺいい

松田 一洲

○ 和子

一滴の水が大河を描き切る

藤原 和美

○ 正治

同じとこじつと見ている時もある

植松 静河

○ 黙人

長すぎる助走夕日が背中押す

平沢やす子

△ 美知子

薄塩が時どき外で破裂する	小泉 正巳
○勉	
削除キー押せばわたしが消えている	松田 一洲
△我流	
幸せの方程式にある風化	鈴木 泰舟
△登代子	
ナナカマド嘘の数だけ実が育つ	佐々木彩乃
△黙人	
太陽が好きで街路樹まだ裸	藤原 和美
△勉	
抜け殻が漂白剤につけてある	樋口 仁
△我流	
ITがなにさ竹とんぼと遊ぶ	荻原 鹿声
△正治	
半音の違い片目をつぶろうか	吉澤 和子
△里江子	
腕時計外し日時計腹時計	小泉 正巳
△和美	
最初はグーそして表と裏になる	岩淵 黙人
△和美	
ファイティングポーズで歯ブラシが二本	和泉あかり
△正治	
愛妻に聞けぬ浄土の暮らしぶり	長井 柳虎
△勉	
矢が尽きてやっと残り火が消せる	小野 富代
△登代子	
省略の極意だなんてボクが消え	小泉 正巳
△里江子	
海が呼ぶすったもんだは忘れよう	吉澤 和子
△勉	
告白を終えた花から散ってゆく	中村 春海
△里江子	
ハイチーズ正直者が目をつぶる	内平登代子
△和子	
添い遂げた糸に幾多の瘤がある	瀧 正治
△我流	
あまりにも静かな海で泣ききれず	荻原 鹿声
△黙人	
お互いに飛べぬ翼の手入れする	岡田 話史
△正巳	

平成十八年二月号から平成十九年一月号の推薦句から、一次選を経て、十名の選考委員より各自が特選◎4点二句、秀逸○2点を  
三句、佳作△1点三句（主宰はそれぞれ1点加算）を選び集計した。

（整理 二宮茂男）